

第5回東アジア唐芋友好ワークショップ IN 韓国

東アジア唐芋友好協会 会長
フェスティバル 社長

郷原 茂樹

第5回東アジア唐芋友好ワークショップは、韓国の金堤市で2014年7月22日、23日に開催された。日本、韓国、中国などから唐芋に関わる約500人の農業、加工業、研究機関、行政などのメンバーが集まり、各国各分野の代表による事業報告シンポジウム等を行った。

唐芋を生かした6次産業化による地域蘇生

韓国でこのワークショップが開かれるのは今回が2回目。4年前の今回は生産農家を中心とする務安郡のコグマ事業団が担当した。今回は全北大学の宋海安教授をリーダーとする全北コグマ産学研究団が担当し、金堤市や同市議会、全北農業技術院などの後援を得て、『唐芋を生かした6次産

業構築による地域蘇生』が主なテーマとなった。

大会にさきだち地元の李建植市長があいさつし、「金堤市は道内最大のコグマの産地であるが、1次産業を土台として2次産業を育成し、コグマの付加価値を高めて広範囲のマーケティングを開発することで、農家の所得向上と加工場による雇用創出、地域経済の活性化をめざしたい。今回の大会は東アジアという規模で学びあえる絶好のチャンスだ」と述べた。

日本からは15名が参加し、フェスティバルの郷原拓東マネージャーが「唐芋菓子の現状と展望」というテーマで、「唐芋は各国のローカル食材としてお菓子など地域独自の商品を生み出せるので、グローバル経



写真1 第5回唐芋友好ワークショップの主催者メンバー



写真2 東アジア唐芋友好協会の総会

済に立ち向かえる地域産業を構築できる」と発表した。また、鹿児島サツマイモ産業振興共同組合の宅間博一店長が「行政と産業がコラボした新事業の創出成功の事例」として鹿児島市に開設したサツマイモ館の事業などを紹介した。

中国からは、中国農業大学の劉慶昌教授が「中国甘藷生産と利用概要」として、中国全般の唐芋事情を解説した。さらに湖北省農業科学院食用作物研究所の楊新笋氏が「湖北省甘藷の研究と産業状況」について発表するなかで、中国がアフリカのエチオピアやモザンビークなどの諸国で唐芋栽培の指導や普及活動を行っていることを報告した。

韓国からは、海南コグマ産業協会の朴東湖会長が「6次産業の限界を克服した韓国型6次産業のモデル」というテーマで、ヨーロッパなどへの輸出も行っていることを紹介した。また農民農産社の李興秀社長が「コグマ加工産業の発展」というテーマで、コグマ加工品がヘルシー食品としてブームが起きている現況のなかで、テレビショッピング番組を活用して大幅な売上げを獲得している事例などを発表した。

このほか、栽培方法や貯蔵方法、農業機

械化、加工方法など、各分野の研究や事例の発表などもあり、また加工品の展示コーナーも設営され、試食会も開かれた。さらに韓国屈指の大規模な唐芋農家をバスに分乗して訪問、畑で現場作業などを視察した。

民間から自然発生的に生まれた唐芋による国際交流

今回のワークショップを終えた時点で、東アジア唐芋友好協会は総会を開き、これまでは2年に1回、3カ国の持ち回りでワークショップを開くことにしていたが、さらに連携を深めるために今後は毎年開くことに規約を改めた。それに基づき、平成15年は中国の湖北省で開くことになり、さらに平成16年には日本の鹿児島で開くことを申し合わせた。

この友好協会はもともと鹿児島に本社・工場を置く唐芋を素材とする製菓会社のフェスティバロを次々と訪れる韓国や中国の視察グループとの交流のなかで生まれた。その交流を永続的に充実させていく手段として、定期的なワークショップを開催することになった。まったくの自然発生的な民間の交流運動である。

いま韓国では唐芋を高麗ニンジン的な健



写真3 唐芋畑を見学する中国のメンバー



写真4 熱心に質問するドゥエル ベーリ東京国際大学名誉教授

康食品としてその価値が見直され、生の唐芋が米の3倍ほどの価格で販売される時期もあり、農家は大変に潤っていた。しかし唐芋農業に参入する農家や企業が急増し、過剰生産による価格低迷の現象が起きた。この傾向は以前から予想されていたことでもあるため、次のステップとして唐芋の加工商品をつくるのが大きな課題となっていた。

国家的な農政の一環としてもこの課題は重視され、政府主導で各地域ごとに農家や加工業者、研究機関、大学、行政などが一体になったクラスター事業団を立ち上げ、その運動を支援している。

世界的に見ても、唐芋の加工業が最も進んでいるのは日本であるため、韓国各地のクラスター事業団は日本へ次々と視察グループを送り出している。フェスティバルには年間200名をくだらない視察者が訪れており、2年前に鹿児島で開催した第4回ワークショップには韓国の各方面から100名あまりが大挙して参加した。

韓国と同様に中国も近年、唐芋を見直す傾向が強まっている。とりわけ中国は世界の唐芋総生産の76%を占めており、劉教授の報告によると、その消費内容は1980年代には飼料がトップで青果や加工はほぼ同程度であったが、近年は加工が全体の50%を超えているという。これをリードするために、唐芋の研究開発者は300名に達して、植栽資源、生物技術、遺伝育種、生理栽培、害虫駆除、収穫後加工などの研究開発グループを形成し、若い博士や大学院生に希

望を与えているという。

交流を基礎に、各国の地域に唐芋産業を構築する運動も

東アジア唐芋友好協会は、毎年1回のワークショップ開催を主にして、個々の多彩な交流も進めていくことにしている。さらにそれを踏まえて各国の地域に具体的な唐芋産業を構築するために、お互いに援助し合う運動にも取り組むことにしている。

すでに中国において、東アジア唐芋友好協会では、その副会長である劉教授を窓口、唐芋産業を構築する5カ年計画のプロジェクトも進めている。具体的には同国最大規模の唐芋でん粉・春雨などを製造する企業に対して、唐芋菓子の分野に進出できるようにコンサルしている。すでに平成14年秋には日本のトップメーカーから導入した製菓機械を配置した大規模なライン工場が完成し、日本とは異なる唐芋菓子の商品づくりをおえて、店舗づくりとともに販売システムづくりなども続行中だ。これは中国初の本格的な唐芋菓子産業のスタートともなり、東アジア唐芋友好協会の運動の一つの成果としたいところである。

また韓国においても、東アジア唐芋友好協会の支援を求めて地域産業を起こそうという動きも起きている。

日本においては、この運動の中心的な拠点となる『唐芋パビリオン』を核とする交流のための諸施設の建設を計画している。2年後の第7回ワークショップは、この唐芋パビリオンにて開催したいものである。